The history of the devil

ノルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ ｈｉｓｔｏｒｙ ｏｆ ｔｈｅ ｄｅｖｉｌ

【Ｎコード】
Ｎ７２０１Ｕ

【作者名】
ノルス

【あらすじ】
〔悪魔〕と呼ばれる便利屋がいる。
彼は普通の便利屋では出来ない暗い仕事ばかり受け、そして全て完璧にやってのける。
受けた仕事を達成出来なかった事は、今までで一度も無い。
しかし、そんな彼は人では無かった。

これは、そんなｈｉｓ（彼の）ｓｔｏｒｙ（物語）である。

プロローグ

本当に大切なものは、目には見えないんだよ。

――「星の王子さま」より――

「フランク、貴様を殺しに来た」

ある高層ビルにて、やたらと飾り付けられ一見するとかなり趣味の悪い部屋で、物騒な宣告が行われた。

部屋はかなり広く二十人程の人間が楽に入る事が出来るだろう、現に今もそれくらいの人数がこの部屋に居る。

先程の物騒な宣告をした張本人は、深夜でしかも室内だというのにサングラスを付け、黒いコートを身に付けている。

「それは何の冗談だ？カストールよぉ？」

その物騒な宣告を受けた張本人は身に付けた高級なスーツと同様に自信満々で、かつ嘲るように言葉を返した。同時に周りからクスクスといかにもな笑いが沸き起こる。

「周りを良く見ろよ、自分の状況わかってるか？」

その言葉が言い終わると、二人を除き部屋に居た全ての人間は銃を構えた。
その銃口は総じて一つの目標に向けられている。
「こっちに二十人、それにウージーとグリースガンで武装してんだ。たった一人で、しかも丸腰のあんたに何が出来るっていうんだ？」
フランクはその脂肪で前にせり出た腹を振るわせながら言い放った。
口調は相対する相手、カストールを嘲ったままである。
彼はこの街では知らない者はいない古株のマフィアのトップだ。街で名前を出せば大抵の人間は恐れおののくし、楯突く者は一人も居ないだろう。文字どおり「泣く子も黙る」というものである。
それだけ彼の組織は巨大であり、この街の影の大部分の実権を握っていた。
フランクは暗殺者の来訪を知ると、それに対処するべく兵隊を集めた。
彼が集めた兵隊は全部で二十人、しかも全員が軍からの横流しのグリースガンやウージーを装備している。
フランクに雇われた彼らは、金さえ貰えれば殺しを全く躊躇しない、筋金入りの傭兵達である。
「カストール、いくらあんたが並外れた便利屋でも、今日でおわりだなぁ？」
脂ぎった声が部屋に響く
フランクは自信に満ち溢れていた。
彼の戦力は全部で二十人、しかも全員が銃で武装している、対するカストールはたったの一人だ。武装さえしていない。

負ける要素など何処にも無い。馬鹿な暗殺者は無惨に死に、自分は生き残る。
そうフランクは考えていた。

「……」

しかしカストールは二十もの銃口を向けられているにも関わらず、全く動じない。普通であれば泣き叫び、許しを乞いそうなものであるが、彼はトレードマークであるサングラスも相まってその表情を知ることは出来ない。
ただ、微動だにせず無感動にその場に立っていた。

「どうした、怖くなったのか？　そうだな、いまなら泣いて詫びれば許してやらなくもないぞ？」

全く動かないカストールを怖じ気づいたと断じたフランクは、その余裕から暗殺者に哀れみを見せた。
彼にしてみれば、この街の影の部分に君臨マフィアのトップである余裕を見せつけようとしたのである。
フランクはこれから泣いて許しを乞うであろ暗殺者を想像し、品の無い笑みを浮かべた。

「寝言は寝て言え」

しかし返ってきたのはフランクの想像と正反対て、彼が望んだものとは大きく違うものであった。
馬鹿にした様な、それでいて断定的な言葉にフランクは激怒した。
せっかく哀れんでやったのに、それを一蹴するなど彼にとっては、何にも勝る侮辱であった。

「この大馬鹿を撃ち殺せ！」

フランクは激情のままに叫び、配下の兵隊に号令を下した。

連続する発射音とそれと同時に二十の銃口から放たれる無数の弾丸。それらは絶対的な暴力となってカストールに降り注いだ。

フランクはカストールが無数の銃弾に貫かれ、無惨にも引き裂かれるのを信じて疑わなかった。

だが、

「な、何ぃ！？」

フランクは驚愕の声を上げる。

何故なら、カストールは黒いコート翻すと同時に残像を残して消えてしまったからだった。それも何度も、である。

いや、消えてしまったというのは語弊がある、正確には残像を残す程のスピードで無数の弾丸を避けきったのである。

カストールを貫く筈だった弾丸は虚しく空を突き進み、部屋の高級そうな壁を破壊する。

そのあまりにも非現実的な光景に、百戦錬磨である兵隊達ですら呆気にとられた。

しかし当のカストールは先程と変わらず無表情のままである。しかしフランクとの距離はゆっくりと、だが確実に詰めてきていた。

室内にカストールの履いたブーツの足音だけが静かに響く。

「何をしてる、奴を殺せ！」

いち早く我に返ったフランクが配下の兵隊達に再び号令をかけた。

彼らも伊達に傭兵はやっていない、彼らは優秀な傭兵である。

彼らは雇い主の意向に従い、再度暗殺者に銃口を向け、引き金ねを引いた。
しかし、それをカストールは普通ではあり得ないスピードで身を捻り、時には跳ね踊る様に宙に舞い避ける。
カストールが宙に舞い、重力に支配されたところを狙って鉛弾を放つも、カストールに当たる前に射線から離れられてしまう。
絶対的な死の弾丸の嵐を掠りもせず避けていく黒衣の暗殺者、その常識では到底考えられない光景にフランクの兵隊達は、次第にある感情に支配されていった。

「ぐおっ……」

黒いコートが翻り、フランクの配下の兵隊の一人の鳩尾に掌がめり込む。兵士が思わず前屈みになるが、そこへブーツによる蹴り上げが見舞われた。
折れた歯をふき出しながら後ろ向きに派手に倒れ込む兵士。

「クソがッ！」

無惨にも屠られた仲間を見て激昂した他の兵隊達が、再び銃を放ち始める。

「……芸が無いな」

如何にもつまらなさそうに呟くカストール。そしてサングラスの位置を少し直すと足元に有った先程屠った兵士のウージーを蹴り上げた。
刹那、もう何度目かになる弾幕が形成される。
兵隊達の叫びと銃声とマズルフラッシュと共に、大量の鉛弾がカストールに向かう。

カストールは相変わらずの無表情でそれを全て避けながら、空中に舞うウージーを掴んだ。
外の暗闇と同じ黒髪が弾を避ける度になびき、コートが翻る。
弾幕の中、カストールは弾丸を躱しながらウージーを操作し、フルオートからセミオートに変更する。無論カストールはウージーの射撃モードを操作している間も、弾丸は躱し続けている。
突然、あれほど鳴り響いていた銃声が止まった。

「ク、クソッ！」

一人が悪態をつく。
連射を続けていたウージーやグリースガンが遂に弾切れを起こしたのである。
しかも悪い事に、全員がほぼ同じタイミングで撃ち始めた為、同時に弾切れをを起こしてしまい、弾幕が完全に途切れてしまった。
唯一の対抗手段を一時的にとはいえ、失った彼らは震え上がった。
只の弾切れをであるからマガジンを交換すれば問題は無いが、それ以前に彼らは恐怖していた。

――一体奴は何なんだ？――

――そんな……銃が効かないだと！？――

――ば、バケモノだ！　そうに違いねぇ！――

自分達より遥かに強いものへの畏怖、そして圧倒的に不利にも関わらず、それと矛を交えなければならないという絶望。

例えるなら、肉食獣と草食獣の関係。

そんな中、無慈悲にもウージーを構えるカストール。
その銃口は彼ら兵隊達に向けられている。
彼らはただ恐怖した。
そして、自分達が狩られるべき獲物である事を知った。
カストールは引き金に指を掛けた。

放たれた弾丸はきっかり１９発。
それらは、違う事無く兵隊達の膝や手首、もしくはその手にあるグリースガンやウージーを撃ち抜いた。
膝を抱え倒れ込む者、手首を抑え踞る者、得物を撃ち抜かれ、周りの光景に呆然とする者。
致命傷では無いものの、暫く斜を構えるには難しい傷ばかりである。
彼らの半数以上は、あまりに突然の出来事に対応出来ずにいた。
そんな静寂はブーツの無機質な足音で破られる。
カストールはウージーを投げ捨て、今しがた撃ち倒した彼らに近付いてきていた。
悲鳴を上げて後ずさる兵隊達。
そんな彼らをカストールは射竦めるように見回した。
その瞳はサングラスによって隠されて、伺う事は出来ないが、だからこそ恐怖が増しているというのもである。
機械的に距離を詰めるカストール。
悲鳴を上げて必死に後ずさる兵隊達。

だが、遂に彼らは壁際まで追い詰められてしまう。
しかし、カストールは兵隊達まであと数歩という所で立ち止まった。

「俺が用があるのはフランクだけだ」

これ以上は用は無い、と彼は事務的に彼らに告げた。
一瞬唖然とする兵隊達。しかし聡明な彼らはカストールの言葉の意味を理解し、直ぐ様行動に移した。

慌ただしく部屋から退散していくフランクの兵隊達、いや元フランクの兵隊達を尻目にカストールは窓際でへたりこんでいるフランクに向き直った。
フランクは腰を抜かし、ガタガタと震えている。
その姿からは、彼が泣く子も黙るマフィアのボスだとは決して誰も思わないだろう。

「だ、誰か、お、居らんのか？」

弱々しい声で言うフランク。しかし残念な事に彼の自慢の兵隊達は先程雇い主を放って逃げ出してしまっていた。
兵隊が逃げ出してしまった以上残る手段は自分で何とかするしか無い。

「ク、クソがッ」

フランクは半ばやけくそで懐から金のルガーを取り出し、カストールに向けて発砲した。
次々とルガーから弾丸が放たれる。
しかしその狙いはあまり正確とは言い難く、乱射しているだけでカストールを射線上に捉えている弾丸はかなり少ない。
フランクが自ら得物を構え、直接敵とドンパチしていたのはもう三十年も前の話しである、それに彼が握る金のルガーにしても実用性よりも外観の美しさを重視した作りになっている。
もう三十年も斜を構えていない老人が、実用的では無い銃を持ったところであまり意味は無かった。
まあ、正確に射線上に捉えてもカストールはそれを避けてしまうので、あまり関係は無いが。

「ぐふぉ！？」

カストールはそんなフランクの哀れな様子を気にせず、首を掴み上げた。
音を立てて趣味の悪いルガーが床に転がる。
かなりの肥満漢であるフランクを片手で軽々と持ち上げたカストール。首がしまっているフランクは顔を真っ赤にしてもがいている。
カストールは眺める様にフランクを見ている。
フランクは空気の供給を絶たれた口を必死に動かしていた。

――助けてくれ――

フランクの口はそう動いていた。
今のフランクの様子をみたら、善人にかかわらず彼がマフィアのボスであるという事に関係無く助けられるかも知れない、それほどに今のフランクは酷い有り様である。
高そうなスーツにはもがいたせいで皺ができ、髪は汗でぐちゃぐ

ちゃに乱れている。
第三者ならほぼ全ての人がフランクを助けた事だろう。
だが、いくら同情を誘う有り様でもフランクが助けられる事は無かった。
理由は簡単。
相手がカストールだったからだ。
カストールはフランクを掴み上げている方とは逆の手を、振り上げた。
フランクの顔に驚愕と絶望が現れ、同時に激しくもがいた。
迫り来る死の運命から逃れようと必死にもがく。

その時である。

彼はあるモノを見た。

いや、見てしまったと言うべきか。
カストールのトレードマークであるサングラスの奥に、何か光るものを見たのである。
見えたのはほんの一瞬だったが、幸か不幸かフランクにはそれが何なのか分かってしまった。

瞳だった。

美しく、しかし限り無く魔性を感じさせる輝きを持った瞳だった。

その黒衣の暗殺者のサングラス奥にあったのは、金色に光る瞳であった。
およそ人ではあり得ない色である。だが、そこには確かに金色の

瞳が存在していた。
魔性の瞳に尋常ならざる恐怖を感じたフランクは更に激しく暴れだす。
だが、カストールの拘束は強く、抜け出せる事は出来なかった、しかし激しく暴れ、無茶苦茶に振るっていた拳がカストールの腕に強く当たり、一瞬だけ肺に空気を送る事が出来た。
再び拘束が強まり、肺への空気の供給が停止する。

「終わりだ」

何処までも冷たい、死の宣告。

「あ……く、ま……め……」

呼吸が出来ない事で、顔を真っ赤にしながらフランクはそうカストールを罵った。
それが彼の、マフィアのトップね最後の意地だった。

彼がそう言った一瞬後、何か湿ったモノを裂くような音と共にフランクの心臓を手刀が貫いた。

ものの数秒でフランクは動かなくなった。
カストールはそれをまるで虫でも追い払うかの様に右手から抜き

放った。
派手に窓ガラスを砕き、屋外に放り出された死体は、緩やかに放物線を描きながら落下していく。
やがてそれはどんどん小さくなっていき、カストールが今いる高層ビルからは確認出来なくなった。
カストールはガラスの無くなった窓から下を伺う様に眺めた。

「悪魔、か」

周りに誰一人居ない中、カストールはフランクが最期に言った言葉を呟いた。

「その通りだ」

今は亡きフランクの言葉を肯定したにもかかわらす、その表情は何一つ変わっていなかった。
カストールは一頻り下の様子をを見回すと、コートと黒髪を翻し、その部屋を出た。

プロローグ（後書き）

如何でしたでしょうか？

感想お待ちしてます。

第一話

深夜、あらゆるものが眠りにつく頃に大通りを歩く者はほとんどいない。大通りは街灯と月明かりでそこそこ明るく照らされているが、時間が時間である、歩いていたとしても大抵は酔い潰れた酔っぱらい位である。

大通りがそんな有り様であるから大通りから一本横に入った道に誰もいないのは仕方のない事であった。

側道には大通りと違い街灯一つ無く唯一の光りは月明かりだけである。道も所々傷んでいて薄汚れていた。

元来この街はあまり治安が良くないのだ、月に何回かは流血沙汰の事件が起こるし、マフィア同士の抗争も日常茶飯事だ。だから人々は夜になると荒事を生業とする者以外は大抵、家に閉じ籠った。好き好んで態々治安の悪い夜道を歩き、犯罪に巻き込まれる馬鹿は居ない。

そんな誰一人いない側道に突如轟音が鳴り響いた。

まるで金属を無理矢理捻り潰したような音が静かだった側道に響き渡り、同時にその衝撃で辺りの地面から汚い埃が舞い上がった。

これが昼間なら人だかりができて大騒ぎになるだろうが、今は人間はおろか鼠一匹いない。

暫くしてあまり綺麗では無い埃が収まると、元の静寂に包まれた側道に戻った。

ある一部を除いて、だが。

この街でも高い方であるビルの側に停めてあった高級車の上に人影があった。

人影に乗られている高級車は見るも無惨に潰れてしまっている、周りには砕けたガラス片が散乱し、月明かりに反射して輝いていた。

その人影はまるで何事も無かったように大破した車から飛び降り降りた。

周りの闇と同じ黒いコートが翻り、その目に掛かっているサングラスに月明かりが反射する。
まだ大きいガラス片を踏み砕きながら、カストールは地面に降りた。
辺りを見回し、誰も居ない事を確認する。そして背後のついさっきまで立派な高級車だったモノを一瞥すると、カストールは歩きだした。
何事も無かったかのように歩くカストール。
車を潰した責任など少しも感じていない、ただ警察から逃れる為幾つかビルを渡った後に飛び降りたら丁度そこに車があっただけだ。普通なら幾らか札束を置いていくが、先程潰したのはフランクのマフィアが所有する車である。持ち主が居ない物に修理代を払う気にはならなかったし、何よりついさっき殺してきた人間に誠意を見せた所で意味は無い。
カストールは振り向きもせずにその場を歩き去った。

「へへへ、さすがは〔デビル〕と言われるだけあるねぇ、まさか本当にフランクを殺っちまうとは。」
「さっさと報酬を寄越せ」
もうすぐ明け方も近い中、その酒場には何人かの酔っ払いが未だ酒を煽り続けている。中には何人か酔い潰れてテーブルに突っ伏し、いびきをかいている者もいた。
その酒場の中の一つのテーブルに二人の男が座っている。

一人は中肉中背の男でベレー帽を被り、他の席の酔っ払いと同じく顔を赤くしている。その反対側にはカストールが座っていた。
ベレー帽の男はやれやれといった表情をすると持っている鞄の中から札束を取り出した。

「へーへー、ほら、これがあんたが待ち望んでた報酬だ」

ドサリという音を立ててテーブルに置かれる札束。その額はそこらの真面目に働くサラリーマンの給料よりずっと高い。
カストールは札束を手に取り契約した額と同じである事を確認し、懐にしまった。

「しかしあんた凄いな、もう今月だけであんたが滅ぼしたマフィアは3つだぜ？」

にやにやしながらベレー帽の男は言った。
その言葉通り、カストールは今月に入ってから3つの仕事を受け、3つとも完璧に成功させ莫大な報酬を受け取っていた。いずれも殺しというハイリスクな仕事であったがカストールは全てやってのけた。
仲介屋である彼にとってもカストールが行う仕事はかなりの利益になるのである。
この街には裏の仕事を専門とする便利屋というものがある。それらは専らマフィア等から押し付けられるような形で仕事を行うのだが、中には通常の便利屋では難しい仕事もあった。
無論便利屋側も大事なスポンサーの機嫌を損ねる訳にはいかないので、どうにかしてそれらの仕事をこなしていたのだが、便利屋の腕を越える仕事はどうしても成功させる事が出来ず達成されないままだった。

そんな中現れたのがカストールだった。

彼が初めて受けた仕事は、最近頭角を現してきた新興組織のトップの殺害だった。

この組織は新興でありながら麻薬の密売で大きな利益を上げ、その金で兵隊を雇っていた。他の古株のマフィアから見れば目の上のたん瘤であったのだがいかんせん、雇われた兵隊が数や質ともに侮れないものであった為、表だって対立出来ないでいた。

そんなマフィアですら二の足を踏む組織を相手にカストールはたった一人で完璧に仕事を成功させた。

それ以来カストールにはそういった暗い仕事が依頼されるようになった。

もっとも、カストールも依頼された仕事を全て受ける訳では無いし、彼は決まった交渉場所を持たない、だから彼に仕事を依頼しようと思うと、先ずは彼が何処にいるかを突き止めなくてはならなかった。

なので彼に仕事の依頼するのは並々ならぬ努力が必用なのである。それが理由で彼との仕事を仲介出来ればかなりの稼ぎになった。

「ただの仕事の結果だ」

カストールは素っ気なく答える。

ベレー帽の男は上機嫌でさらに言葉を続ける。

「今じゃあんたに仕事を頼みたいって奴が山程いるんだぜ？次に受ける仕事も是非俺を通してくれよな、〔デビル〕さんよ」

頼んだぜ、というベレー帽の男。

デビル、というのはカストールの裏の世界での二つ名である、その引き受ける仕事の内容と目標は必ず抹殺する仕事っぷりからいつ

しかそう呼ばれるようになっていた。名前はきちんと知らせているが、時たまこうして呼ばれる事がある。カストール自身も別段気にしている訳では無く、そのままにしていた。

「さあな」

カストールは先程と変わらず素っ気なく答えた。
カストールにしても無差別に仕事をしている訳では無く、受ける仕事の目標は殺すしかどうしようもない輩だけだった、実際彼が葬ったマフィアはかなりえげつない事をやっていたマフィアばかりである。それに今月はもうかなり稼いでいた、もうこれ以上は必用はなさそうだった。
カストールが今の懐具合からそう考えた時、ウェイトレスがやって来てテーブルにビールの入ったジョッキを置いた。ベレー帽の男は一言礼をいってジョッキを自分に引き寄せ早速飲み始めた。ウェイトレスが営業スマイルをしながら去っていく。ベレー帽の男は暫くしてジョッキから口を放した。

「あんたも何か飲めよ、さっきの報酬で金はあんだからさぁ？」

ベレー帽の男はカストールそう言った。
此方が飲んでるのに相手が素面では余り面白く無い。それに終止冷静なこの男を酔わせてみたいという好奇心もあった。

「……」

カストールは無言で何も答えない。表情を窺おうにも、何時も掛けられているサングラスによって表情を読み取る事は出来ない。
無言を肯定と受け取ったベレー帽の男は大きな声でウェイトレスを呼びつけた。

やって来たウェイトレスは先程ビールを持ってきたウェイトレスとは違う娘で中々美人である、彼女は営業スマイルとマニュアル通りの言葉を並べ、メモを片手に注文を待った。

「……」

カストールは腕を組み、無言で答えない。

「おいおい、折角注文聞きに来てくれたこのお嬢ちゃんはどうなんだよ？」

そう言って囃し立てるベレー帽の男、元はといえば自分がウェイトレスを呼んだのを綺麗に忘れている。ウェイトレスはウェイトレスで早く注文を受けたいらしい。

「ウォッカを」

酒を注文する以外にこの状況を打開する方法が無い事を感じ取ったカストールは渋々といった感じで酒を注文した。

注文を受けたウェイトレスは一礼をして立ち去っていく。

「ウォッカ、ね、あんた中々いける口だな」

酒に酔って顔を赤くしながら笑うベレー帽の男、カストールが案外すんなり注文した事に機嫌が良いようだ。

対するカストールは一度大きく溜め息を吐いた。

暫くしてカストールが注文したウォッカが届くと、二人は乾杯（片方は無理矢理させられた）し、お互い酒を煽った。

一方的な酒宴はもう少し続きそうだった。

酒宴はベレー帽の男が酔い潰れるまで続いた。
カストールは酔い潰れた仲介屋を尻目に一人会計を済ませ、店を出た。
彼もベレー帽の男が酔い潰れるまでにかなりの量を飲んだが全く酔っておらず、素面の時のそれと同じであった。
カストールはまだ明けきらない闇の余韻の中を歩く。
その足取りはついさっき酒を飲んだ者とは思えない程に軽やかである。
その事に気付き、カストールは僅かに眉をひそめた。
実のところ彼は酒を飲んでも酔うことは無い、いや酔えないのだ。
理由は全く分からない。ただいくら酒を飲んでも酔う事が出来ないのである。
とんでもなく酒豪なのではと言われればそうなのかも知れないが、カストールの場合は違うと言い切る事が出来た。
以前、自分が全く酔わない事に気付いた彼は、ただ自分はひたすらに酒に強いだけなのでは？そう考えて一度どれくらい飲んだら酔うか試した事があるのである。
結果としてはただ彼の持ち金をすり潰すだけに終わった。
どれだけ大量に、かつアルコール度の高い酒を飲んでも決して酔う事は無かった。
考えながらもカストールは歩みを止める事は無い。
ただひたすら自問自答を繰り返した。
何故自分は普通の人間の様に酔わないのか？
今まで何度も考え、その度に導きだしてきたその答えを無意識に声に出しかけた。
だが、いつまでもその答えは彼の口から出る事は無い。
何故なら、彼は答えが出る直前に何か違和感を感じたからである。

それと同時に歩みも止まった。
カストールは自分が歩いている路地を見渡した。夜明けとはいえ辺りはまだ暗いが、何のへんてつの無いただの寂れた路地である。
だが何かがおかしい。
カストールは静かに腰にある自らの相棒に手を伸ばした。
路地は静寂に包まれている。かろうじで聞こえるのはカストールが地面を踏みしめる音と、彼の僅かな呼吸音位だ。
突然、影から何かが飛び出してきた。
それが合図だったかの様に、他の影からも何かが飛び出してきた。
それらは影から飛び出すと同時にカストールへと殺到する。
その姿は人のそれとは大きくかけ離れており、、大人を楽に両断出来るほど巨大な鎌を振りかぶっている。彼らは髑髏にも似た顔をこれから起きるであろう鮮血の宴会への歓喜から歪ませていた。
一方カストールは腰の愛剣の柄に手を伸ばし、何時でも剣を抜ける様にしているものの、その挙動には何処か余裕が感じられた。
「少し付き合ってやる」
異形達が迫るなか、カストールは誰に聞かせる訳でも無く言った。
一人の男とそれに迫る多数の異形の集団。どちらが狩られる側なのかは明白である。それを自覚してか異形の集団は一直線にカストールに迫る。だがカストールはその場から動く素振りを全く見せない。それを諦めと感じた異形達は一気にカストールとの距離を詰めた。
異形達は振り上げた巨大な鎌を一気に降り下ろした。
そして肉を断ち切る鈍い音と共に―

異形達の髑髏の頭が地面に転がった。
頭を失った胴体が力無く崩れ落ちる。

「……つまらんな」

倒れ込む異形の死骸に囲まれる形になっているカストールは呟いた。その呟きには侮蔑と飽きを含んでいた。
そんな彼の両手には一対の剣が握られている。亡霊の名を冠するその一対の双剣は自ら久々の出番に歓喜するかの様に、街灯の光を受け鈍く光った。その光は細いながらも何処か剛胆さと獰猛さを感じさせた。

「久々に剣を抜いたが、これは期待はずれだな」

カストールは地面に転がる死骸を、サングラス越しに眺め、ブーツで転がしながらぼやいた。
もし襲われたのが普通の人間ならば、異形達が振るった鎌によってばらばらに切り裂かれていたはずである、しかしカストールは自らに迫る刃を全て捌ききり、尚且つカウンターによる必殺の一撃を異形達に叩き込んだのである。
それは彼の反射神経と判断力、そして並外れた瞬発力が為せる正に人外な技であった。
彼のぼやきに反応したのかは定かでは無いが、再び通りの影という影から異形達が現れた。しかも先程カストールを襲撃した時よりも遥かに多い。

「――――!!!」

異形達の一体が吠える、それに続いて次々異形達は吼え咆哮の大

合唱を作り上げる、まるでまだ勝負は終わっていないと言うかの様に。
異形達の咆哮の中、カストールは平然として立っていた。
並の人間ならば異形達から放たれる恐怖や残忍性を感じとり、脚がすくんで動けなくなってもなんらおかしい事は無いような状況である。
だがカストールはあまつさえよそ見でもしそうな雰囲気である。
カストールが闇を纏った異形達に恐れや恐怖を抱かないのには理由があった。
実のところ、カストールはこういった異形達と出会うのは初めてでは無い、だから一度見た事があるという安心感を抱いているのは否めない、しかしこれは理由であるものの、一番の理由では無かった。

カストールが闇の異形達を恐れない理由、それは闇の異形達に何処か懐かしさを感じたからだ。

これは久方ぶりに同郷の友人に会うかのような感覚に近い。
そして彼には分かったのだ。

自分はこの闇の異形達と同質、つまり自分は人　ならざる存在の〔悪魔〕であるという事を。

彼は初めこの事実に驚愕した。だが否定したいと思うものの、何処かでそれを認める自分がいる。
魂が、自分は悪魔である、そう叫んでいるのだ。

カストールは次第にそれを受け入れていった。というよりも自らが持つ非常な能力に気付いたからというのもあったが。
確かに闇の異形達は畏怖すべき存在である、その姿に恐怖を覚えない者は居ないだろうし、巨大な鎌を振り回せる事から力も相当なものだろう、しかし自分もまた闇に属する者であり畏怖されるべき存在なのだ。
同質であるが故、彼は闇の異形達を、悪魔を恐れなかった。
異形達は漸く咆哮を止め、カストールに向き直った。やはりその表情は今宵の獲物であるカストールを切り裂く事を想像し、歪んだ笑みを浮かべていた。
先程とは違い、じりじりと間合いを詰める異形達。まるで獲物を捕らえたという事に悦に入っているかの様だ。

「貴様らの態度に免じてもう少し付き合ってやる。」

言うやいなやカストールは剣を構え、異形達の集団に持ち前の神速で斬り込んだ。
普通ならば死に急ぐような行動であるが、あいにくサングラスで彼がどんな表情をしているのかは伺う事が出来ない。
だが、口の端がつり上がっているのが唯一確認出来た。
残像が残る程のスピードで突っ込んできたカストールに異形達は歓声を上げた。
獲物が自ら狩人である自分達に飛び込んできたのである、血に飢えた闇の狩人達が歓声を上げたのも無理は無い事だった。
カストールが一番最初に接近した異形の一体は獲物を切り裂く為、自らが持つ巨大な鎌を振り上げた。
だがその鎌が降り下ろされる事は無かった。
何故ならカストールは一対の愛剣の内、片方で異形の両腕を切り飛ばし、もう片方をその髑髏のような顔に突き刺したからだった。
乾いた音を立てて腕ごと切り飛ばされた鎌が地面に転がった。

カストールは動かなくなった異形を振り払うと、次の異形の処理に取り掛かった。
適当に近くにいた数体の異形を神速の剣技で切り裂いていくカストール。
一体の異形が鎌を振りかぶり、一気にカストール目掛けて降り下ろす。
だがそれはカストールが右手に持つ片割れの剣に阻まれた。
カストールの剣と異形の鎌がぶつかり合い、甲高い金属音と火花を生じさせる。
異形は一層力を込め、鎌を押しきらんとする、対するカストールは片手で剣を握っているが、此方も全くひけをとらない。
このまま鍔迫り合いになるかと思われたが―

「甘いな」

鎌を受け止めていないもう片方の剣が唸り、異形の猟奇的な笑みを浮かべている顔が縦に両断された。
頭を失った異形は鎌を握る力が緩み、その鎌はカストールに弾き飛ばされる。
中枢を失った異形はゆっくりと地面に倒れ込み、暫くするとまるで風に吹かれた灰のように消えてしまった。
カストールは剣に付いた血糊を振り払い、改めて自分と相対する異形達を見回した。
彼が闇のが異形達と出会してからここまでの時間は僅か数分である。そして異形達の内、三分の一程が既に彼に斬られ、闇に還元されていた。
その事実に流石の異形達も狼狽える。今まで斬り伏せられた仲間を見て、バラバラに襲い掛かっては無駄だと学習した彼らはカストールを囲む様に、周りを囲み始めた。
始め、カストールに数体で一気に襲い掛かった時は、カウンター

で残滅されたが、ここまで数が多ければいくらカストールが強くとも、何体かは迎撃を免れて刃を届かせる事が出来るだろう。
彼らはそう考えた。
化け物じみた風貌の彼らだが、殺戮に関係する知恵は働くらしい。

「もういい、か……」

突然カストールは声を上げた。
まるで遊びに飽きた子供の様な言い方である。
そして、彼は両手に握る剣を下げ、剣先を地面に向けた。

「来い」

構えを解いたカストールは、異形達にそう告げた。
あまりに予想外なカストールの行動に、一瞬停止してしまった異形達だが、直ぐ様我に返ると鎌を振り上げ、奇声とも怒声とも分からない叫びを上げながらカストール群がった。

刹那、黒衣が舞った。

「やはりこの程度か」

血糊を払った双剣を腰の鞘に戻しながらカストールはぼやいた。
そんな彼の足元には巨大な鎌や、えたいのしれない死骸が転がっ

ている。
あれだけの異形達に一斉に襲い掛かられてもカストールは死ななかった、ましてや傷一つ負わなかった。
襲い掛かられた時、彼は異形達の予想以上の力を振るい、完璧に異形達を迎撃しきったのである。
異形達がカストールの力を見誤ったと気付いた時には時既に遅く、総じて剣の錆となった。
カストールは辺りを一度確認して、異形達が居ない事を確認すると、止まっていた歩みを再び進め始めた。
彼が歩き去る背後で、漸く開けた朝日を浴びながら異形達の残骸は灰の様に崩れ、消えていった。

第一話（後書き）

出来れば感想お待ちしてます。

感想が来ると、作者が狂喜乱舞します。

第二話（前書き）

戦闘は皆無です

第二話

日曜日

それは、学業や仕事をする者にとって、一週間で最も待ち遠しい日である。

何時も仕事三昧の者も、またそうではない者も、家族や仲間たちと一週間の疲れを癒すべく酒を煽ったり何処かへ出掛けるのだ。

大抵はそうやって思い思いの休暇を楽しむのだ。

カストールはその大抵の内の一人である。

便利屋というものはその職種柄、中々休みを取りずらいものである。

彼らの雇い主達は、一年中抗争を続けているからだ。

例外的に、何処か一つのマフィア専属の便利屋の場合、その腕っぷしの良さによっては休暇を許される事もある。

休暇、と言っても普通のそれに比べると、微々たるものではあるが。

しかし、彼は日曜日を休暇にする為、その日に依頼された仕事を全て蹴ったのだった。

雇い主からすれば、それは許されざる行為であるが、先日のマフィアのトップを意図も簡単に暗殺した事で、彼らも強く言えないでいた。

カストールへの心証が悪くなれば、仕事を依頼出来なくなってしまうかもしれない、いや、依頼出来なくなるだけならばまだ良い、彼らは心証を悪くする事で暗殺の対象にされる事を恐れた。事実、彼にはそれだけの力があるのは、今までの仕事っぷりを見れば一目瞭然である。

そんな訳で、やや強引に休暇を取ったカストールは、あるものと対峙していた。
それは、フランクのような暗殺の対象でも無ければ、先日抹殺した闇の異形達でも無い。
深い呼吸によって精神統一をとる。

彼が対峙するもの、それは楽譜だった。

彼は一度軽く息を吸うと、手を前に――オルガンの鍵盤に手を配置した。
同時に、歌が始まる。
まだ幼い、子供の声が複数奏でられた。
カストールは、それに合わせてオルガンを緩やかに奏でていく。
カストールの伴奏の旋律と歌とが、まるでパズルのように合わさり、一つのハーモニーを築き上げていく。
美しいといえる程の合唱、だが当のカストールはオルガンを弾きながら、眉をひそめた。
だが、それはサングラスによって、殆ど気取られる事は無かった。
カストールが眉をひそめた理由、それはその美しい合唱が、神を讃える、つまり聖歌だったからだ。

今カストールが居る場所は教会であり、日曜日のミサの真っ最中である。
教会の中には神を信じ崇める者達が、修道服のようなミサ用の服を着て集まっていた。
カストール自身もサングラスはそのままであるものの、何時もの黒いコートでは無く、ミサ用の服を着せられている。
神を讃える節がくる度に眉をひそめるカストール。
闇に属する者である彼にとって、その対極である神は忌むべき存

在でしかない。それに、忌むべき存在という事を抜きにしても、彼は神を好きになれなかった。
か弱い者を救うと謳いながら、この界隈にはその救われるべき者が溢れているのが現状である。
彼は仕事柄、そんな人間を山程見てきた。
中には堕ちるべくして堕ちた連中も居なくはない、しかし必死に足掻き、足掻ききってそれでも駄目だった者の方が多かった。
飢えた子供にパン一つくれてやれない神を、彼はどうしても敬う事が出来なかった。

そんないかにもその場にそぐわない事を考えながらも、カストールはオルガンを弾いていく。
やがて聖歌が終わり、聖歌隊の子供達が壇上から降りて牧師の説教が始まると、カストールの姿は消えていた。

「こんな所にいたんだ」

聖歌が終わると、早々とミサから逃走したカストールは、修道服から何時もの黒いコートに着替える中、声を掛けられた。
聖歌隊の子供達より幾らか歳上であるが、やはりその幼さ故の純粋さを滲ませた声だった。

「リヴィアか」

カストールはコートに袖を通し、振り返りながらにその声の主の名を言った。
そこに居たのは、修道服を着た１４歳から１５歳くらいの少女で

ある。

「伴奏してくれてありがとう」

リヴィアと呼ばれた少女は柔らかな茶髪を揺らし、その灰色の瞳でカストールを見つめながら礼を言った。

「でも、やっぱり途中で居なくなっちゃったね」

苦笑を浮かべるリヴィア。だが、その表情は優しげだ。

「やっぱり、神様は嫌いなの？」

「嫌いだ」

リヴィアの問いに速答するカストール。

その答えにまた少女は苦笑した。

「それって、その瞳のせい？」

リヴィアはゆっくりと歩み寄り、カストールのサングラスを外した。カストールは何も抵抗しない。

サングラスをすんなりと外されたそこには、フランクを見据えたあの金瞳があった。

「……」

彼は無言のまま答えない。

「その目のせいで、自分を悪魔だと思ってるんでしょ？」

三度苦笑する少女。

カストールの瞳が魔性のそれであるのを、現時点で死なずに知っているのは彼女だけである。

カストールには、半年前からの記憶が全く無い。

彼は半年前の日没から少し後に裏通りで倒れていた所を、リヴィアに拾われたのだ。

リヴィアの小さな体躯では、カストールを動かす事すら困難だったにも関わらず、彼女はカストールをこの教会に運び込んだ。

修道女見習いである彼女にとって、それは当然の行動だったのだろう。

この時、この教会の牧師は所用で偶々居なかった。だから彼女は彼が目覚めるまで、看病をした。

そして、やがて目覚めたカストールを見て、その瞳を知ったのである。

「何時も言ってるけど、誰だって欠点は持ってるんだよ？」

それに、と彼女は顔の半分を覆っていた髪をかき揚げた。

そこには、閉じられた左目と、それをを縦断するように痛々しい傷が走っていた。

「私だって、こんな欠点をもってるんだしね」

そう言って、隻眼の少女は微笑んだ。

彼女もまた、カストールと同じように、教会に拾われた身である。

三歳の時に交通事故にあった彼女は、左目を失い、そして両親を失った。

不幸にも両親は移民であった為、彼女には親戚が居なかった。
そして、身寄りの無かった彼女は教会の運営する孤児院に引き取られたのだった。

「誰だって欠点はあるんだよ？　だから貴方の目はちょっと変わってるだけなんだよ、悪魔なんかじゃないよ」

そう言って微笑むリヴィアの言葉にカストールは、無言で彼女の髪を元に戻し傷を覆った。
彼が神を好きになれない理由はもう一つある。
リヴィアである。
何故神は得体の知れない自分のような者に、優しく接してくれる彼女にあのような傷を付けたのか、彼には理解出来なかった。

「俺以外にオルガンを弾ける者は居ないのだろう？」

リヴィアに外されたサングラスを再び付けながら、カストールは言う。
半年前、記憶の無い彼には出来る事は2つあった。
一つは、剣を振るう事。もう一つは、ピアノを、オルガンを演奏する事だった。
拾われた当初、やることの無かったカストールは、孤児院の倉庫の整理を手伝った際に偶然見付けた楽譜をすらすらと理解し、また演奏する事が出来た。
この事から、カストールはこの教会でミサがある時、必ず聖歌の伴奏をするのである。
これは彼なりの恩返しの意味もあった。

「それに、音楽は嫌いじゃ無い」

その言葉に、リヴィアは楽しそうに笑った。

「素直じゃないんだね」

「……フン」

まるで女神のような少女の笑み、自然とカストールは自分が軽く笑っている事に気が付いた。

およそ、薄暗い仕事をしているとは思えない、自然な笑み。

何時も無表情なカストールだが、彼女といる間は自然に笑う事が出来た。

「あ」

突然、リヴィアは何かを思い出したのかのように、笑うのを止めた。

「どうした？」

「この後って何か予定ってあるかな？　良かったら昼食食べていかない？」

少女はお願いのつもりなのだろうが、その期待に輝く瞳を見て断れる人間がいるだろうか。いや、居ない。（反語）

「……どうせ、俺が作るのだろう」

選択肢など無い癖に、とカストール。

「あ、分かった？」

「何時ものパターンだろうが」

あはは、と頭をかきながら先程とは違う意味で苦笑する少女。
この教会には人員が彼女を含めて、たったの二人しか居ない。
なので、教会だけの業務ならいいが、孤児院も運営している為、人手が全くと言っていい程足りてないのだ。
カストールが聖歌の伴奏をするのはその為だし、その後必ず孤児院の昼食手伝わされていた。

「ごめんね、何時も手伝ってもらって」

「構わない、それより早く行かないと子供達を待たせてしまう」

カストールの言葉に笑いながらリヴィアは頷く。

そして、二人は共に歩きだした。
むかうは厨房である。

「ホント、素直じゃないね」

「……しつこいぞ」

数十分後、カストールは巨大な鍋を持って子供達に囲まれていた。
子供達とは先ほどの聖歌隊である。

「ね、ね、今日は何？」

「やた！　カストールが作ったんだって！」

「え、ホント！」

あまり広くは無い食堂には、十人ばかりの子供が居た。

「きちんと座ってろ、配膳できん」

子供達に包囲されたカストールは苦笑しながら言う。

はーい、と元気良く返事をしながら席に着く子供達。

それを見てカストールは鍋を置き、配膳を始める。

メニューは野菜のコンソメスープと、パンである。

次々器に注がれていくスープを見て、子供達は待ちきれないといった表情を見せ、「まだー？」や、「おなかへったよう」等と囃す。

「むう、私が作った時にはこんな反応しないのに……」

カストールがスープを配膳する隣で、パンを準備していたリヴィアが口を尖らせながら言う。

「ミスが多いだからだ」

それに対し、カストールは的確にその原因を言った。

修道女見習いであり、この孤児院の実質の職員である彼女は、当然子供達の食事も作らねばならない。その食事が子供達にはあまり評判が良くないのだ。

別に彼女が料理が下手な訳ではない、下手な訳ではないのだが、

ただうっかりしてミスをしてしまうのである。
　彼女が料理を作ると、必ずと言っていいほど野菜の皮が残っていたり、水の量を間違えてやたら味が薄くなったりするのだ。

「カストールのは絶対おいしいもんね～」

　頷き合あう子供たち。
　カストールにしても料理を習った相手は、リヴィアなので基本は同じで変わらない筈なのだが、そこは性格の違いというものだろう。

「もう！　そんな事言ってたらもうご飯作ってあげないよ！」

　腰に手を当て、さっきより口を尖らせて不機嫌そうにリヴィアは言った。
　その言葉を受けて、「だってぇ」「お野菜の皮がはいってるんだもん」、「じゃあカストールに作ってもらおうよ！」等と子供達が騒ぎだし、今度はリヴィアがむきになって反論する。

「リヴィア、お前まで騒いでどうする」

　割と本気で子供達と言い争っているリヴィアを、カストールは窘める。
　その言葉とは裏腹に、その表情は柔らかいものだった。
　家族はおろか、親しい友人等皆無に等しい彼にとって、この孤児院は唯一心から安らげる場所だった。
　彼が便利屋というハイリスクな仕事を始めたのも、万年資金不足に悩まされていた孤児院を資金的に援助する為である。
　この事は、彼女達は一向に知らない。

　完全に拗ねてしっまた彼女を、慌てて宥める子供達。

それを見て、表情を和らげるカストール。

平和な時間が過ぎて行った。

第三話（前書き）

第三話

孤児院での昼食会から数日後、カストールは一仕事終えた後ある場所を訪れていた。

そこは、彼が住む町の中心街から少し離れた場所にあった。

中にはやや広めの室内に、数多くの銃や弾丸が置かれている。当然、そんな物騒なものを置いてあるのだから、そこを訪れるのはカストールのような荒事を専門とするような者ばかりである。実際、店内にはカストールを含めて何人かの客がいだが、いずれも素人から見れば分からないものの、腰や胸の辺りが不自然に膨らんでいる。

彼らはカストールと同じように、並べられた銃を見て回ったり、手入れの道具や弾丸を大量に買い込んだりしていた。

ここは銃砲店である。

それも、荒事師等の物騒な連中を相手に商売をする類いのものだ。

カストールが銃を購入しようと思ったのは、ここ最近の仕事でかなりの確立である状況に陥るからである。

彼は基本的に腰に携えた双剣以外を持たない。これはカストールが剣にこだわりがある訳でも、銃を嫌っている訳でも無く、ただ剣以外持っていないだけなのだが、カストールはその気になれば弾幕を避ける事も出来る為、別段銃が無くて窮地に追い込まれるような困った事態なった事は無いのだ。

が、窮地追い込まれるような困った事は無いのだが、溜め息をつく程度には困った事はあるのだ。

カストールの仕事は殺しの仕事が殆どである。そして、彼の仕事の目標は大抵の場合、大量の金と労力を注ぎ込んで兵隊を傭いこみ、殺されまいとする。

そうした必死の心構えの彼らには、カストールの格好はあまりにも無防備に見える、早い話が舐められるのだ。

一見すると一切の武器を持たない（実際には腰に双剣がある）カストールの格好は、彼らを奮い立たせてしまう事が多々ある。
結局はそれは些細な抵抗でしかないのだが、カストールにしても仕事はスムーズに進んだ方が好ましい。
そこで、彼は力の代名詞でもある銃を購入する事にしたのだった。
ちなみに、この店の事は先程報酬を受け取った仲介屋から少しばかり札を握らせて聞き出したものである。

と、いう訳で銃砲店にやって来たカストールであるが、今まで敵から拝借した銃しか使った事の無い彼に、銃の良し悪しなどわかる筈も無く、ふよふよと商品棚の周りを浮遊していた。
この状態が暫く続く事になる。

「何やってんだ、あんた」

相変わらず浮遊しているカストールを見かねた店主が声をかけた。

「銃が欲しい、だが、どれが良いのか分からない」

あっさりと答えるカストール。
それを聞いた店主は、溜め息をつきながら言った。

「銃ってのは使う場面によってこそ良し悪しが別れるんだ、あんだが銃を使う場面はどんなだ？」

腕を組ながら、カストールの要望を聞く店主。厳つい男だが、気は良いらしい。
カストールの要望を具体的に纏めると、第一に派手である事、こ

れはある種のハッタリである。第二にその場への制圧力がある程度ある事、カストールの場合、相方を組む何て事は皆無であるため、一人で沢山を相手どれるものが望ましい。第三に持ち運べる大きさである事、派手さや制圧力だけを追い求めるなら対物ライフルやガトリングガンを使えばよい、しかしそんな物を使えば移動の時に目立って仕方ないし、保管や手入れもオーソドックスなハンドガンに比べれば段違いに費用や手間がかかるし、何より場所をとる。

以上の要望を聞いた店主は、頭をかいている。まるで面倒な客にあったと言わんばかりだ。

「難しい注文だな」

ばりばりと頭をかく店主。

「手持ち出来る大きさで、派手で、おまけに制圧力ときたか……」

うーん、と唸りながら考える店主。

面倒そうにしているものの、仕事に対して一切手を抜かない事を信条にする彼は、カストールの無茶な要求に対して真面目に考えた。

「しゃあねぇ、ちょっと着いてこい」

暫く考えていた店主だったが、このままでは埒があかないとばかりに、店のの裏を指しながら言った。

奥に何があるんだとカストールは思ったりしたが、何時も通り無表情で店主に着いていった。

店の奥にあったのは射撃場だった。
あまり広くは無いが、きちんとした設備が整えられている。

「ちょっと待ってろ」

店主はそう言うと、カストールを射撃場に残し店の方へ戻っていった。
じっと待つカストール。
暫くすると店主は、何やらカートを押しながら戻ってきた。

「注文に合いそうなやつを幾つか持ってきたから、その中から選んでくれ」

そう言い、カートから銃を取りだして並べ始める店主。
それらを一通り並べると、店主は銃のカストールに渡しながら説明を始めた。

「こいつはイタリア製のアサルトショットガンだ、ポンプアクションとセミオートの切り替えが出来るし、何よりショットガンだけあって威力は申し分ねぇ代物だ」

そう言って店主が渡したのは、フランキ社製ＳＰＡＳ－１２である。
これは店主の言った通り、　とポンプアクションセミオートの両方を対応させたモデルだ。重量は重いものの、反面、射撃が安定しやすいという特徴を持つ。
カストールはそれを受けとり、グリップや取り付けられたドットサイト等を暫く眺めていたが、何を思ったのか銃を店主に返してしまった。

「おいおい、試し撃ちくらいならさせてやるから、もうちょっとちゃんと選んでくれよ」

怪訝な表情をする店主。

「大きすぎる」

カストールは店主に向き直り、却下の理由を述べた。

確かにＳＰＡＳ－１２は最初から戦闘用として設計されたショットガンだけあって強力な代物であるが、いかんせん大きすぎるのである。

その全長は８０センチ、持ち運びするにはやや大きい部類に入る。無理にやればコートの腰辺りの裏に吊るす事も出来るだろうが、あいにく腰には愛剣が陣取っている。

購買意欲無しと見た店主は、次の銃をカストールに渡した。

それはやたらとゴツい、巨大なリボルバーだった。

「こいつは俗に言う世界最強の拳銃ってヤツだな、これなら熊も一捻りだ」

派手さと威力は申し分無いぜ、と店主。

店主の次の候補は、Ｓ＆ａｍｐ；ＷＭ５００である。

この銃は、弾丸の発射エネルギーが４４マグナムの実に三倍という化け物のような銃である。

カストールは店主の説明を聞きながら、Ｍ５００を弄っている。

先程と違い、大きさでアウトというものでは無い為、カストールも真面目に見ている。

だが、銃を検分するてが、シリンダーを横へ振りだした時、動きが止まった。

「……これも駄目だ」

カストールの手が再び動き出した時には、既に店主に銃が返されていた。

「今度は何処が気に入らないんだ？」

やや飽きれ顔で店主が言う。

「装弾数が少ない、それに連射が出来そうに無い」

そう言ってカストールはサングラスの位置を直した。

Ｍ５００の装弾数は五発、通常のリボルバーなら六発から八発が普通であるところを比較すると、やはり少ないのは否めない。それに、この銃は取り扱い説明書には、「射手の安全は保障しかねる」と書いてある程、発射した際の反動が大きい。これは４４マグナムの３倍のエネルギーであるからこれは当たり前なのだが、それではいくら人外な力を持つカストールといえど、明らかに連射など出来る筈が無い。

派手さや威力は店主の言う通り申し分無いが、その装弾数の少なさと連射性の低さから制圧力はあまり望めなかった。故に却下となった。

却下された銃を前に、店主はカストールを相手にしている最中に何度吐いたか分からない溜め息をもう一つ追加した。

「んじゃ、これならどうだ？　軍から流れてきたヤツだが、悪い銃じゃ無いぜ」

そう言って店主は、銃をカストールに渡した。

カストールにとって今まで渡された銃は、どれも馴染みの無いも

のばかりだったが、この銃は割りと見慣れたものだった。

「ベレッタか？」

呟くカストール。確かに形状はほぼベレッタのそれであるが、それとは違い、ストックとフォアグリップがついている。

「そいつはベレッタのマシンピストル、Ｍ９３Ｒだ。」

カストールの反応に嬉々として説明を始める店主。

「見た目は拳銃だがな、こいつは３点バーストが出来る、あんたのいう要望も叶えられてると思うぜ」

店主の説明を聞きながら、Ｍ９３Ｒを手で弄るカストール。
元々拳銃をベースに造られたこの銃は、さほど大きくも無く、且つ３点バーストによってある程度の制圧力を持っている。

「どうだ？　気に入ったか？」

これまでと違い、却下の声が掛からない為、それを購買意欲有りと判断した店主は押しにかかろうとする。

「何なら試し撃ちするか？」

的を指差しながら、店主は言う。
カストールはその言葉を受けて、渡された弾倉を叩き込み、片手でＭ９３Ｒを構えた。

「おいおい、何の為にストックとフォアグリップがあると思って…

…」

カストールの構えを見た店主が正しい構え方を教えようとした、が、それはほぼ同時に発生した３つの銃声にかき消された。
Ｍ９３Ｒは、３点バースト射撃時に命中率の上昇と反動を吸収する為、ストックとフォアグリップが付いている。が、カストールはそれを完全に無視、２２口径でも構えるように片手で構えたのだ。
普通ならばその反動で銃身がぶれていしまい、まともに当たらないだろう。しかし――

「……こいつは驚いたぜ」

カストールはその反動を抑え込み、銃身のぶれを修正し、完璧なまでに封じて見事的を撃ち抜いたのである。

「気に入った、これを貰おう」

型破りな射撃スタイルに感嘆と呆れを見せる店主を尻目に、くるくるくるとＭ９３Ｒを弄ぶカストール。

「だが、ストックとフォアグリップが邪魔だ」

外してくれ、とカストール。

「あ、ああ、そうだな、あんたなら必用は無いよな」

突き出された銃を受け取りながら同時に苦笑しつつ呟く店主。
店主は「少し待っていてくれ」と言い、再び店の奥に消えた。
その言葉に、カストールは腕を組み壁に背を預けた。

それから幾らかの時間が経った時、不意に足音が聞こえてきた。
カストールは店主かと思い、そちらに顔を向ける。

「よぉ、あんたが〔デビル〕か？」

だが、現れたのは彼の予想とは大きく違う人物だった。
現れた件の人物は派手な白いスーツを着込んでいる、歳は中年の一歩手前といった位か。

「何の用だ？」

あからさまにあまり機嫌の良くない声でカストールは言う。
現れた人物の腰は不自然に膨らんでいる。つまりそれは件の人物が、彼と同じく荒事を生業とする者である事を示している。リスキーな仕事をする割には、彼は無用な争いは好まないのだ。

「なあに、只の仕事の依頼さ」

件の男は椅子を引き寄せ乱暴に座った。

「ある男を殺して欲しい」

男は懐から、写真を取りだしカストールに渡した。
引き伸ばされて、あまり鮮明とは言い難いものではあったが、そこには銀髪の赤いコートの男が写っていた。
カストールはそれを見ると、一瞬、彼の纏う雰囲気が仕事の時のそれに変わった。

写真の男から何故か酷く既視感を感じる、そして、非常に僅かなものだが自分と同じ闇の気配を感じるのだ。
何より、この男の背にある大剣に見覚えがある、何時かは分からないが、昔見た事があるように思えたのだ。

「名前はトニー、隣街に住んでる野郎だ」

「……」

カストールは男の説明を全く耳に入れず、写真を食い入るように見ている。
その思考は何故この写真の男、トニーに既視感を覚えるのか？の一点に絞られていた。

「報酬は5万、どうだ？」

カストールが考えている合間に、男は仕事の説明を終えた様だった。
ほとんど聞いていないカストールだったが、大概彼に入ってくる仕事というのは殺しが殆どである、要は目標を違う事無く殺せばいいのだ。この依頼人の男もトニーという男を殺して欲しい様だったから、余り話を聞かなくても大した事にはならないだろう。
だが、カストールには確認しなければならない事が、一つだけあった。

「この男の職業は何だ」

写真から視線を外す事無く、依頼人に問うカストール。その質問の趣旨がイマイチ分からなかったのか、依頼人の男は少し呆けた顔をした、が、やがて怪訝な表情をして彼の質問に答えた。

それを纏めると、トニーという男は、隣街に住んでいる凄腕の便利屋らしい。だが、その仕事は彼とは違い殺しは一切やらないようだ。そして、とんでもなく気紛れで、依頼を選り好みする事も多く、それで依頼側から反感を買って制裁を受ける事もあるらしい、だが、それらは例外無くトニーによって蹴散らされている。
以上の説明を聞くと、カストールは軽く息を吐き、

「その仕事は受けない」

そう静かに男に告げた。

「な、何でだよ！」

カストールが依頼を受けるものとばかり思っていた男は、困惑と怒りの声を上げた。

「5万だぞ！　何が不満なんだよ！　何が不満なんだよ」

「掃いても有り余る程いる便利屋など、殺す意味が分らん」

「俺はただクソッタレのトニーを殺してくれればそれで良いんだよ！」

「なら尚更だ、私怨で仕事は受けん」

にべもなく断るカストール。男はまさか依頼した仕事を断られるとは、夢にも思っていなかったらしく、その怒りも相まって、激しく激昂していた。男にしてみればトニーに引きつづき、雰囲気は違えど同じ便利屋にあしらわれた事で、頭に血が登っていた。
辺りの温度が急激に下がっていく。男は今にも腰に吊るされた得

物を抜き放つ寸前である。片やカストールは、相変わらずサングラスで表情は読めないが、明らかに”スイッチ”が入りつつあった。

「外してきたぜ、ってデンバース、店でドンパチは勘弁しろって何回言えばわかるんだよ」

およそ日常ではあり得ない荒事を生業に持つ者だけが纏える雰囲気、それも一番剣呑なものにもかかわらず、店主は店を戦場にしない為、その雰囲気を両断した。

「ッチ！」

男、デンバースは盛大に舌打ちをすると、どかどかと乱暴な足取りで去って行った。

カストールも、デンバースが去った事で剣呑な雰囲気を解いた。

それを見て、店主はやれやれとため息をついた。

「全く、これだから”狂犬”は……一度出禁にしてやろうか」

「狂犬？」

「奴の通り名さ、気に入らない奴に誰彼構わず噛みついて回るからそう呼ばれてるのさ、今はトニーとかいう便利屋にご執心らしい」

血の気の多い奴は大変さ、と店主。カストールはそれに一瞥で答えた。

「と、あんたの銃だったな、ほら、お望み通りストックとフォアグリップは外したぜ」

カストールは差し出された銃を受けとった。店主の言葉通り、M93Rにはやや不格好ながらもストックとフォアグリップは、綺麗に外されていた。カストールは構えをとったりして具合を確かめている。

「できるだけ綺麗に外したつもりだが、もし不具合があるんなら、隣町に二ールっていう凄腕のガンスミスがいるから、俺んとこじゃ無くて、そっちに持っていってくれ」

「そのガンスミスの方が、腕が良いと？」

「まあな、それと厄介者はうちはお断りでね」

店主はそこで一旦言葉を切り、やや声を抑えて言った。

「あんた、巷で噂のマフィア殺しだろ？」

「……」

「うちは荒事師もよく相手に商売してるが、何事にも限度ってもんがあってだな、あんたはその限度を越えてんだよ」

「……そうか」

「ま、目立たないように出入りしてくれりゃいいがな」

がはは、と威勢良く笑う店主。

その後、会計を済ませたカストールは店を出た。

第三話（後書き）

はい、デビルメイクライ二次小説を書いてる癖に、イージーモードのネヴァンすら倒せない作者です。

何回ダンテが熱いベーゼを受けて沈んだ事か、もはや数えきれません。

と、まあ、そんな事はさて置き、今回は前回と共に、戦闘場面が皆無となってしまいました。本当のところ、デンバースとやりあって貰おうかな、とも思ったんですが、やはり同じウェイトの相手でないと映えないかな、と思いまして、戦闘は取り止めました。

途中、鬱陶しいくらいに銃について出てきましたが、これにも理由があります。

作者は、カストールにどんな銃を持たせるか、物凄く悩みました。使うのは片手で扱える銃と決めていたのですが、片手で扱える銃なんて山程あります。それに、デビルメイクライにおいて、銃は絶対に欠かせないものでもあります。ダンテのエボニー&アイボリー、トリッシュのルーチェ&オンブラ、レディのカリーナ＝アン、まあ、レディのはバズーカみたいなものですが。それでもやはり銃は欠かす事が出来ません。

悩みに悩み抜きました、実に3ヶ月間。最終的にはＳＩＧＰ２２６かＭ９３Ｒ、オートマグ、スチェッキンマシンピストルかにまで絞ったのですが、そこから迷う迷う。ま、結局はＭ９３Ｒに落ち着いた訳ですが。

さて、長くなりましたが、次回は多分戦闘があると思いますので、読んで下さった読者の方、どうか末長くお付き合い下さい。

では、この辺で。

第四話

真昼のメインストリート。
治安が悪いこの周辺においても、この場所だけは人々が集まり、活気を溢れさせている。
店の呼び込みや、市場の売り買いの活気。時には些細な喧嘩も起きるが夜と違い早々と収集がつく。
そんな喧騒溢れる天下の往来に明らかに不釣り合いな服装をした者が二人程いた。
一人は首に十字架のネックレスと紺色の修道服を着ていることから彼女が教会の関係者であることが窺える。もう一人は最近寒くなってきたとはいえ、昼間に着るにはまだ早いように思われる真黒なロングコートを着込み、顔にはサングラスを掛けている。
いささかというレベルを超越した服装に周りから怪訝な視線を受けるものの、一人はフードを深く被り、もう一人はそんな視線何処吹く風といった様子である。

「ねぇ、皆私たちのこと見てるけど、どこか変かな？」

好奇の視線に少し不安になった修道女見習いが、まだ幼さが大いに残る表情で憂い、その隻眼を隣を歩くサングラスの男に向けた。

「言うまでも無いだろう」

１４・５才の少女が修道服を着て歩いているというだけで珍しいと言えるのに、その隣に明らかに”違う”雰囲気を纏い、尚且つ昼間にサングラスなど変わった服装の男が居るのである。
まだ幼い修道女とヤバ気な黒ずくめの男、大半の常識人ならこの組み合わせは普通では無いと答えるだろう。そしてこの時間メイン

ストリートを歩いているのは殆どが常識人である。注目されない訳が無かった。

「そんなに修道服って変かなぁ」

隣に居る黒ずくめの男では無く自分が原因と考えるあたり、彼女の人の良さが窺える。

「さっさと行くぞ」

周りの視線と彼女の言葉等何処吹く風とばかりにカストールは歩を進めた。実際、原因を考える為に頭を捻ったところでどうしようも無いのだ。

「あ、待ってよ！」

慌てて追いかけるリヴィア。

カストールに追いついたリヴィアは文句を言うもの、やはりカストールは聞く耳を持たず歩き続ける。それに腹を立てたリヴィアがさらに文句を重ねた。

そんな二人を見て周りの通行人も、案外普通なのかも知れないと思い過ぎ去っていく。

実に平和な時間であった。

「昼間っから女の子とデートたぁ、やるじゃないのよ」

黒衣の仕事屋と修道女が平和を満喫する中、とあるビルの屋上からそれを見下ろす者が居た。その視線は階下のアンバランスな二人組に注がれている。その顔には昼間だというのにサングラスが掛けられており、その表情を伺い知る事は出来ない。だが、口の端がつり上がっている事からにやついている事が伺える。いかにも噂好き、といった表情でった。

しかし、その手には穏和な表情とは百八十度趣の違う東洋風の細身の長剣、日本刀が握られており、尚且つその切っ先には赤黒いナニカがこびり付いていた。まるで、今まさに切ってきたと言わんばかりに。

「いちゃいちゃしちゃって、まるで”人間”みたいだねぇ」

男はにやにやと品の無い笑みを浮かべながら、剣を払いこびり付く血糊を落とした。

血液特有の粘ついた音を立てながら、コンクリートに深紅の飛翔が飛び散る。男の表情が品は無いものの全く悪意の無い笑みである為、さながら趣味の悪い絵画の用にも見える。

それが合図だったこの様に、隣のビルが日光を遮って作る影の中で何かが唸った。凡そこの世のモノとは思えない響きである。しかし、それが届いていながら男は全く動かない。否、動じようとしなかった。

「――――――!!」

そんな男の態度を不遜とばかりに、影から何かが躍り出た。

陽光を浴び、その全貌が明らかになる。

それは蜥蜴であった。しかし、それが普通の蜥蜴である訳は無く、成人男性とほぼ同じ大きさと、鋭くジャックナイフの様な爪が持ち

合わせていた。
空間を断ち切るが如く飛び出した異形は、その血走った瞳で数メートル先に立つ男を睨み付けた。

『ブレイド』

これがこの悪魔の名称である。遥か昔、魔帝によって作り出された精兵である。その力は形を保つ為に依り代を必用とする最下層の悪魔とは段違いであり、正に魔界の尖兵という謳い文句に恥じない力量を持っている。仮に、ごく普通の人間がブレイドと出会ってしまったのなら、人間は震えて神に祈る事位しか出来ない。
だが、眼前の男は神に祈りを捧げるどころか、ブレイドを一瞥すらしない。少しばかりそういった”闇”の知識のある者ならこの悪魔の前では人間など障害にもならない事など分かりきっている筈だ。しかし、男はブレイドを認識すらしていないかの様にを見向きもせず、ビルの下を見下ろしている。
いつまでもこちらに意識を向けず、しかも恐れを微塵も感じさせない男。それに憤りを覚えたのか、男の目の前に躍り出たブレイドは、こちらに見向きもしない眼前の男に対し、絶対的優位を理解させる為、全力で吼えた。
ブレイドは魔界の尖兵といっても、下級悪魔である。それ故原始的な感情しか持っていない。しかも、その本質は殺戮である。ブレイドは獲物が全く獲物らしくない事に腹を立てていた。
あらゆる物がその震動で揺れる。あたかも恐怖に震えているかの様に。

「んだよ、こっちは良い所だってのに」

男は気だるげに顔に掛けているサングラスの位置を直すと、漸くブレイドに向き直った。しかし、その表情はサングラスで読みとる

事は出来ないものの、目の前の異形に対しての畏怖の念は全く無い。例えるなら、テレビの前を横切られて苦言を漏らす、といった程度だろうか。

その態度を見て、今度こそブレイドは激怒した。

そして、件の愚か者を血の海に沈める為に、その殺戮本能を全開に動き出した。

正に疾風の如く、優に5メートルはあった距離を一瞬で詰めると、男の目の前で跳躍。憤怒のままにその巨大な爪を自身の運動エネルギーを乗せて降り下ろした。

その時、ブレイドは男の口の端が歪んでいるのを確認したが、それを意にとめる事無くそのまま爪を振り抜く。明らかに優位は自分にあり、気にするまども無いとブレイドは考えていた。

刹那、何かを貫く水っぽい音と共に、昼間の陽光を浴びて煌めく刃が、鮮血で彩られ、

「これだから下級(バカ)悪魔は困る」

ブレイドの体を銀色の刃が貫いた。

ブレイドは驚愕を感じる間も無く、動かなくなる。

男はブレイドから剣を引き抜くと、再び血糊を払う。やはり先程と同じく振り払われた血はコンクリートに深紅の印しを着けた。

男は件の異形が飛び掛かった瞬間、つまりブレイドが自身の運動による推進力と重力が均一になり、完全に無防備になった所を狙い刃を突き出したのだった。しかし、それは一瞬でもタイミングを誤れば一瞬後に運動エネルギーの乗ったナイフの様な爪に自分が切り裂かれる事になる。

血を噴水のよろしく噴き出していたブレイドだったが、男はそれを刀を振るい払った。

ごろり、と転がる異形の死体。男はそれを一瞥したが直ぐに興味を失ったのか、また別の方を向いてしまった。ロシアンルーレット

よりも危険な賭をしたというのに、表情には一切緊張が無い。むしろ物足りない様な表情である。
正直な話、男はブレイドが動く前に斬る事も出来た。だが、それを解っていてこの男はわざと危険な方を選び、成し遂げたのである。

「ったく、”匂い”で俺に敵わない事くらい分かんないのかね」

やれやれ、と溜め息を吐きながら男は血糊を払い、刀を鞘に戻そうとしたが、その手を止めてしまう。
男の視線がある一点に集約される。

「まぁだやんのかよ？　懲りないねぇ」

その視線の先には、先程ブレイドが飛び出してきた影に注がれている。そこには沢山の異形が集まり、ある種の異界を作り出している様にも見えた。
どの異形も血と悲鳴と絶望に飢え、それを激しく欲している。
彼らに怯えは無く、あるのは原始的な感情のみだ。それ故、先程ブレイドを意図も簡単に葬った男に刃を向けようとしている。

「良いのか、つっても分からないか。まあ、こっちとしても服汚されたし、責任はとってもらわないとねぇ」

男は場違いな言葉と共に、抜き身の刀を肩に担いだ。
確かに、男が着ている白いコートには、先程串刺しにしたブレイドの血の赤が盛大に彩っており、もはや元が白色だったのか分からなくなっている。

「良いぜ、こんなに熱烈なお誘いだ。断る訳にゃいかんな」

男はニヤリと口の端を歪めた。

「けどよ、俺とのダンスは難易度はｈａｒｄだぜ？」

付いてこれるか。と男。

次の瞬間、異形の大群と血濡れの男が激突した。

飛び掛かってきたブレイドを紙一重でかわし、振り返り様に足を切り払う

足を失い、尚且つ攻撃を避けられた事でバランスを失い地面に転がるブレイド。

筆箱からぶちまけられた鉛筆の様に転がっているブレイドを、男は足で押さえ付け、その背に刃が突き刺さった。

「無茶な借金は駄目だぜ？　ご利用は計画的にってやつだ」

心底楽しいと言わんばかりの笑みを浮かべる男。そして、刀を捻り脊椎を切断する感覚と共にブレイドは動かなくなった。

男はもう二三度、傷口を掻き回す様に刀を捻る。

ぐちゃぐちゃ、とまるで鍋でもかき混ぜる様な音が辺りに響く。

男はブレイドが完全に死んだ事を確認すると、漸く刀を抜いた。

「ったく、何度やっても結果は同じだってのに。こんなのが同胞とは涙がでそうだぜ」

愚痴を漏らしつつも血糊を払い、刀を鞘に納める。その姿は先程の言動とは打って変わって繊細でありながら秀麗なものだった。

「アンタもそう思うだろ、ギルバちゃん？」

刀を鞘に納めた男は、異形達が飛び出してきた影に視線を向けながら言った。

その言葉の直後、このビルよりももう一段高いビルによって作り出されている影の中で何かが揺らめいた。

「フォルクス。その呼び方は止めろと前に告げた筈だが」

影から出てきたのは１つの人影だった。

歩いて出てきたのでは無く、そこから突如現れた様に感じられたが、男は何も言わない。

糊の効いている以下にも高そうなダークグリーンのスーツを着た件の人影は、顔等の肌が露出する部分を全て包帯で覆っていた。

「いーじゃないのよ。俺とアンタの仲なんだしさぁ」

軽薄そうな笑みを浮かべているであろう男、フォルクスであるが、サングラスを掛けているせいで端から見れば口を歪めている様にしか見えない。

そんなフォルクスの態度を見て、影から現れた人物、ギルバは溜め息を吐きながらも歩を進めた。その細い腕には、フォルクスと同じく日本刀が握られている。

「それで、敵情偵察は行えたのか？」

「ああもう大成功。キチンと覗いてやったよん。全くアイツもやるよねー、流石の俺も昼間っからデートしてるなんて思わなかったし」

べらべらと他人のデート事情を喋るフォルクスに、ギルバは苛立

ちを隠しきる事が出来ない。見た目は細いギルバであるが、ちゃんと必用な部分には必用以上の筋肉が付いている。
この筋肉をフル活用し、彼の得物である東洋風の長剣を振るえば、大抵のものは一刀両断出来てしまうだろう。
べらべらと喋り続けるフォルクスをいっそ斬ってしまおうか、と彼が考えた時、唐突にフォルクスが喋りを止め、

「ん、斬りたきゃ斬ってもいいんだぜ？　ま、斬れるんならならの話だけどな」

先程と同じ軽薄な笑みを浮かべ、先程とは比べ物にならない程の残酷さを浮かべた。
フォルクスの言葉を境に、辺りの雰囲気が一瞬で変わる。余りの急変にギルバは思わず得物を握る手に力が入る。

「……挑発か。そんな物に乗ってやる義理は無い」

「まあ、そうだよねぇ。いくら魔剣士の息子とはいえ、片割れの上にまだ半人前だもんな」

「……」

容赦の無い嘲りの言葉。それは、鋭い刃となってギルバに突き刺さるが、彼は沈黙したままだ。
目に見えて空気が不穏な物になってゆく。片や血濡れになり真っ赤に染まった男、片やダークグリーンのスーツを纏い男。二人は同じ型の得物を引っ提げ、対峙している。どちらかが少しでも動けば切り合いになる程張りつめた空間が精製されつつあった。
フォルクスは抜き身の刃を担いだまま、ギルバは鞘を左手で握ったままである。フォルクスはともかく、ギルバは先程の挑発によっ

て腹に据えかねるものがあるが、先の理由から動く事が出来ない。
まるで、戦いになるのを恐れているかの様に。
やがて、時間の流れの感覚が酷く曖昧になった時、

「今、ここでキサマを斬ってやる事も無いだろう」

ギルバは唐突に背を向け、先程自らが現れた影へと歩き始めた。

「ふ～ん、お誘いはＮｏって事かい？」

フォルクスは戦いを蹴ったギルバを、今度は茶化す様に見詰める。
しかし、ギルバはそれには反応せず、そのまま歩いていき現れた時と同じ様に虚空に消えてしまった。

「ホント、お堅いねぇ」

フォルクスは血を払い、刀を鞘に納めながら、相変わらずのにやついた表情でそれを見詰めていた。

「あんなのの親父に負けるなんて、パパも耄碌したな」

フォルクスは呟くと、血濡れコートを翻し闇に消えた。

第四話（後書き）

まず始めに。

焼　き　土　下　座

いや、本当に申し訳ありません。約二ヶ月以上も更新が遅れてしまって。本当に申し訳無い。しかしですね。言い訳をさせてもらうならあべしッ……

カストール「クズが」

フォルクス「俺も大賛成だね」

ちょ、待ってよ。いきなりパンチは無いよ、っていうか得物を構えないで。せめて言い訳させて欲し……

リヴィア「言いたい事はそれだけ？」

いや、だからそれを今言おうと……

リヴィア「二人とも、ヤっちゃって☆」

カ&フォ「Die！！」

ギィィャアアアア！！

～作者粉砕。しばらくお待ち下さい～

ゴールドオーブを使用しますか？
↓Ｙｅｓ／Ｎｏ

うう、ヒドイ。確かに二ヶ月以上も更新してなかったけど、文字通り粉砕するなんて。

フォルクス「んな事ほざいてないで、他にやることあんだろ？」

カストール「わざわざ俺達を後書きにまで出向かる程の事だ。さっさと理由を話せ」

うう、覚えとけよ、作者に手を挙げるキャラクターなんて……

リヴィア「作者さんまだ足りなさそうだよ？　Ｍなのかな？」

どちらかというと受けより攻めの方が「ねぇ、二人とも」ゴメンナサイ、真面目に話させてもらいます。

ええと、今回も所謂「燃える」シーンはカットさせてもらいました。これは、デビルメイクライという確立された１つの作品に、私のオリジナルを放り込む為の舞台作りです。ええ、盛り上がりに欠けるのは分かってるんですが、やはり土台はキチンとしておきたいなぁ、と思いまして。

カストール「長い準備だな」

分かってるって、次から本格的に原作と絡んでいくから。あ、勿論小説１のやつですよ？

リヴィア「それだけ？」

うんにゃ、後、カストールとフォルクスの実力、つまり強さなんですけど、大体デビルメイクライ１のダンテとほぼ同等かやや強い位を想定してます。理由は言うとネタバレになんので勘弁です。

フォルクス「ま、当たり前だね」

今回の話でギルバとフォルクスが一触即発状態になった時、ギルバが引いた理由もこれになります。

カストール「ただの説明不足だろう」

う、痛いとこを……でも、実際、どうやって強さを書いたらいいかなんて分からないんでぶっちゃけ苦肉の策です。

良し、言わないといけないのはこれくらいかな。

それじゃ、リヴィアさんお願いね。

リヴィア「また、次回にお会いしましょう！　って次回に私の出番はあるのかな？」

えっと、無いかも……

リヴィア「本当に駄目作者さんだね！」

ぐっは！

では、また次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7201u/

The history of the devil

2011年10月24日02時06分発行